

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	灯に集ふ虫
Author(s)	後藤, 壽夫
Citation	龍南, 183: 100-116
Issue date	1922-10
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/8596
Right	

灯に集ふ虫

後 藤 壽 夫

一

午後の六時ころ——太陽は、西の空に傾きながらも、尙燃ゆる火線を地上に投げ下して居たが、緑がゝつた軟かな影は庭の中に満ちて、窓にさしかゝつた梧桐の大きな葉にも、やがて来る夜のすがすがしさを思はせる青い影がゆらめいて居た。

操一は窓によつて、汗ににちむ胸をはだけながら、終日の暑さに勞れ果てたような市街の屋根をぼんやりと眺めて居た。

もう三日したら試験もすむ。そうしたら故郷の町へかへれるのだ。

毎年の夏を、瀬戸内海の岸の有名な温泉場の別荘で暮す操一は、夏の海については數多い思ひ出をもつて居た。

寶石の断面のような、不思議な青い輝きを藏して、ゆるやかにうねつて居る水の上を、細々としたみを引いて走るボート。港の棧橋には、内海通ひの化粧した汽船が眠つて居り、汀近くには、水泡から生れた童子のように、黒い少年達が、あかき水とたわむれる。ボートがあまりに小さすぎて、乗つて居る青年達があまりに元氣すぎると、ボートは氣嫌をそこねた猫のやうに、波の上でころりと赤い腹を

かへす。そんな時には、待ちかまへて居たようにはしやいだ笑聲をひやかせて、彼等は水の上にはうり出される。

ボートについては、こんなこともあつた。

——晴れた空の下で、心持ち強い風に、海が白銀色の笑ひをたてて居る午後、操一がひとりでオールをあやつりながら、防波堤の側までやつて來ると、そこにも波にゆられて一隻のボートが防波堤の石とすれすれに漂つて居た。乗つて居るのは珍らしくも青い水着の若い女で、それが石にうちつけられまいとしきりにオールを動かして居るのだがどうも思ふまゝにならないらしい。桃色のオイルスキンを巻いた髪がじれつたさうにゆらぐ。

氣の毒に思つて操一が二つのボートを結び合せて沖の方に漕ぎ出して、さて結び目をどうかうとすると『ネ、どかないでちようだい』と女の聲がひびいた。操一がどきまぎして居ると、女は快活にオールをとりあげて、今度は自分のボートを先にしてグングン漕ぎながら、

『ホラ、こんなに漕げるのですよ——でもさつきは……ね、やつぱり漕げなかつたのよ』と言つて、その眞紅な口唇を顔中に廣げるようにして笑つた。——

窓によりながら、この奇異な海の經驗の一つを繰りかへして見た時に、操一のはゝにも何とはなしの微笑がうんだ。

『さうだ、もう三日たつたら歸れるのだ。——妹も待つて居ることだらう。今年は、あいつに綺麗な海水着を着せて、ボートをのりまわしてやらう』。

一人前の女にならうとして居る年頃の妹と二人で、人々の間をボートで行く——彼の頬にはまた若やいだ甘い微笑が湧いて來た。

その時、宿の女中が障子をあけた。

『あの電報でございます』。

操一は、この小さな紙片が全てのの人々にもたらす、あの力強いショックを感じて、思はず机をばなれた。

二

晝の間は、灼けつく白金板が市街を包む。動かない空氣が通りに満ちて歩く人々の精氣を吸ひ取る。が夜が來ると、打水の冷氣が街路を流れ庭に入り、中空に浮いた月の光の中で、熱氣に萎れた街と人どが、次第に息をふきかへす。

操一は、その夕暮れの來るのを待つてぶらりと下宿を出た。

街は、夕涼みの人々のゆるやかな歩きりと輕やかな裳どに満ちて居た。が操一の頭の中には、さつきの電報がもつて來た、混亂が渦を卷いて居た。

時代の齒車は靜かに動く——操一は子供の時、母につれられて、緣日の地獄極樂のからくり人形を見たことがある。無限地獄、焦熱地獄、針の山、蒼白い亡者達が赤い青い鬼共に追ひたてられて、禹々然として動く。決裂地獄の亡者達は、黒鬼のまわす火焰の齒車にかゝつて、四肢ばらばらにきりさかれてしたゝりおちる血潮の瀧！幼い操一は母の袂に顔をかくして戦いた。——その齒車のやうに時代はめぐる

のだ。その動きは静かだが、何人もそれを沮むことは出来ない。敢て沮まうとする人があつたら、その人のもつ唯一の運命は、時の齒車の間で肉と骨、血と五臓とを無残にひきしやがれることだ、決裂地獄の亡者のやうに。

それのみではない。時の齒車は、その動きに抗する意志もなくなつて無心に生を營んで行く人々をも、必要に應じて暴君の如くひきくだく。

操一は袂から、さつきの電報を取り出して街の灯にすかしながら、もう一度讀んで見た。

『コーバ ハサンスイサイフミ』

そしてこの父親からの電報を袂にねちこむやうにして、暗い横町にそれた。

輝かしい大通りから、暗い横町に入ると、急に世界が變つたやうに思はれた。低い軒並み、黄色い光物の腐つた臭ひ、屑の山、みずばらしい子供。春の廣野を走る汽車の旅客が、トンネルに吸ひこまれた時、こんな氣持ちはしないだらうか。あらゆる近代の都會は、春の廣野である、輝かしい大通りの幾筋かを持つと共に、深く暗を藏して萬物が腐れ朽ちる、空氣の重い街のトンネルを隨所に掘つて居るのだ。

操一は、歩きながらロンドンの貧民窟に生れた人間は、二十五才まで生きるのは稀れだと言ふ話を思ひ出した。

たれか、とんと肩をうつた。ふりかへると、二つの黒いかげが立つて居た。

『うん。酒井か』

『さうだよ。どうしたんだい』。相手は高等學校の制帽をぐつとかぶり直した。

『どうもしないよ』

『どうかしたらう。これは何だい』

見ると酒井の手にはさつきの電報が握られて居る。『君の袂からすべりおちたので、一寸中味を拜見したんだ』

『ぬ？』

『僕はおめでたうと言ひたい、君自身のために。こうした或る工場か他の資本家によつて倒されたと言ふことで、君自身が、現代はマンドリンをひいたり、神様を讃へたりしては、居れない時代だと言ふこと、また、そんなことをしようと思つても出来ない人の澤山居る時代だと言ふことを、ほんとに知つたら、この上ない幸ひなんだ。』酒井は眼を輝しながら手をふりまわした。

『酒井さん行こう』

太い聲がうながした。氣がつくと、酒井の連れの青い労働服の男は、二三間先きで二人の立話しを待つて居るのだつた。

『ぬ、行きませう。おい君、一處に行かう』酒井は操一の手をぐんぐんひつばつた。

さうだ。そこへ行つてもいいのだ。操一は酒井のくれた父の電報を溝の中にはうりこんだ。

總ての勞働者——老人は無論、若い者でもその顔には必ず、見ゆる手でさざまれた陰の線がある。

或る者の顔は、その陰の線にうづめられて人間のもつすべての生氣、すべての濕ひを失つたもののやうに思へる。こんな顔を見た時に或る人は殆んど本能的と言つていゝような不快を覺ゆる、嫌惡を感じる『生れなかつた方がかへつて幸ひだつたらうに』とつい叫んだりする。この感激なく發奮なく活力のない、木偶のような顔の彼方に、彼等の獸のやうに虚げられ器械の如く搾取せられた生活を透視して、その顔の持主の前に熱烈なる義憤と同情を捧げ得るものは至つて稀である位だ。だが或る者の顔は、その陰の線によつて、凄慘な生氣をおびてくる。生活の鑿が、自然の靈腕にふるはれて、恐るべき彫刻的効果をもその顔の上に表す。彼等の顔は鬭争の中から飛び出した獸のそのやうに輝いて、あくまで自己の力を信じ環境と戦ひ、自己の周圍にひきぢぎらるべき鐵鎖の音を聞く者の恐しい生氣と決意に満ちて居る。(そんな顔に、もう少し陰が濃くなると、周圍の凡てに憎惡と破壊とを投げつける、呪咀に生きる暗の人の顔となるのだが)。

操一と肩をならべて歩いて居る勞働者の顔は凄かつた。額に深く刻み込まれた太い線の一本は彼の蒼白い顔に、凄慘な鬭争の意志を表明する或る物を浮き出させて居た。

操一は、酒井がどこへつれて行かうとするのか知らなかつた。だが、どこへ行かうとかもわれない。級の異端兒である酒井が、早くから勞働者の群に近づいて居ることは知つて居る。が、そんな男にひつぱられて行くのも面白からう。もうすべて起つたことだ。

黒い通りがつきて、三人は再び華かな大通りに出た。電車の軌道と、アスファルトの道との美しい直

線模様。そびゆる洋風の大厦——銀行、會社、商會、取引き所、社交俱樂部、カフェー、ド、パリ——そしてその裏通りには、闇の深い、泥の香の高い腐つた町が横つて居る。

操一は、黙々として歩いて行つたが、酒井と青服の労働者とは、しきりと話を交へて居る。

『さうだ。夢をもつて——芝居でもやる氣で、この運動に入つて來たものは、必ず失望する。若い學生などがよく僕等の仲間にと入つて來るが、大抵途中から逃げ出してしまふ。失望するのだ、でなければ、恐しくなるのだ』労働者は、太い、熱のこもつた口調で話をつづける。それを聞くとはなしに聞いて居る操一は、その筋の通つた話振りに思はずひきつけられた。『紙の上で讀んで居るような華かさは決して僕等の運動にはない。何故かつてそれは戦ひだから。戦ひが美しかつたり、華かだつたりするのは、たゞ紙の上か、繪筆の先きか、それとも活動寫眞だけだ』彼の眼が、次第にかゝやきをまして來るのが、操一にも感ぜられた。

『そして、運動が戦争の連續だつたら、そこにはまた、男性的だと言はふか、猛獸的だと言はふか、兎に角爆裂的な興味があるだらうが、僕ら労働者は、最も制限された範圍内で生活を維持して行かねばならない『生活する』と言ふ現代と妥協した、ものうい休戦狀態が常に存する。中には食ふことだけで全くうちのめされてしまつて立つことも出來ない仲間も少くはない』

労働者の言葉には、動かすことの出來ない力強さがあつた。操一は我が前に展開されるこの新しい世界に、内心、眼を見はらきには居れなかつた。

『だが、僕等學生の運動が、全然だめだと言ふわけでもないでせう』酒井は、危く衝突しようとした自

轉車をさけながら、問ひかけた。

『全然だめだとは言はぬ。僕等の運動は、現在が苦しくつてならない貧乏人のおこした運動だ。貧乏人とはまるで反對な境遇に居る人で、而も彼等の叫びの正しいことを理解し、更に進んで彼等の運動に合体しようとする人々の純情と聰明は認める。だが、どうもほんどの生活苦を知らない人々は、安樂椅子の上で勞働歌を歌つたり、紅茶をのみながら、革命談をやりたがつたりして困る。光は上からは來ない！』

自動車が通つて行つた。それが街路におとす影が、威嚇するように道を歩く人々の上をこすつて過ぎた。三人の前には、公會堂のセツション式の屋根が空間を四角にきつてそばだつて居るのが見えた。星の輝きの多くなつた空は重くたれて、半ばかけた月が、街路樹の葉の上でそりかへつて居た。

白い鐵の柱でかざられた門には、筆太い字で張り紙がしてある、操一は始めて自分の行かうとして居るところがわかつた。

『社會問題講演會』と、かゝれたその門を三人が入らうとした時、突然！植込みのかげから、背の高い男の姿がとび出した。操一が或る氣味悪い豫感にうたれて、きつと身構へした時には、その男は、勞働者の胸もとに取つかんばかりに身をよせて居た。

四

操一は、息切れがして倒れさうになつたので、前に走つて居る酒井をよびかけた。

『おい、どうしたんだい。待て待て、馬鹿らしい』

が、酒井は、後をも見ずにさつと横町にまがつてしまつた。それにひきづられて操一も横町にまがつたが、酒井の姿は、もう見えない。馬鹿らしくなつたので走ることを止めて、肩で息をさつた。

一体何のことだ。植込みから飛び出した男が、労働者になにか言ふと、労働者は豹のように身をひるがへして、暗に消える。相手も反對の方の植みに姿を消す。續いて酒井が、かけ出したので、何かわからすかけ出したのだ。夢の中の怪物におつかけられるような氣味悪さを感じながら――

曲つた通りは、黒い通りだつた。うむれた空氣が鼻をつく。

『おい、ぐづぐづしてはいけないぜ』と肩をたたくかれたので氣がつくと、酒井が何時の間にか横にたつて居た。高等學校の制帽は懷にでも入れたのだらう、頭の上にはない。

『どうしたのだ。僕にはわからないじゃないか』

『警察の奴が張こんで居て、主催者側を捕へようとして居るのだと、先きに行つた同志が知らせてくれたので、米川さんが逃げたのだ。俺だつてぐずつては居れないから、だまつて走つたのだ。あんな時には、すぐついて來るのだぜ』

『ついて來いつて走れなきあ仕方ないじゃないか。そして僕は關係してゐるわけじゃないし』

『まあ何でもいい。これから米川さんのうちに行かう』

『誰のうちだつて』

『ばつきの青い服を着て居た人さ。行かう。いつでもこれだからね。いくら熱を出さうとしても、いつも大きな白い手がおさへつけてしまふ。だが、そのおさへつけられた熱が、鬱積した場合には何か起

るだらう』

酒井と列んで、せつせと足を運びながら操一は若い空想を走らせた。

——地を掘る黒い革命家、その住んで居る家に、不思議な経路で自分は運ばれて行く。ガラリと戸を開ける。正面にバクーニンの肖像がかゝつて居る。部屋に入る。煙草盆の代りにダイナマイトの空箱が置いてある。名前を持たない『第何號』の男女が影のように來て影のように去る……。

『その時は米川さんは十八だつたんだ』酒井は大きな聲で話しの先を續ける。操一の空想はどぎれた。『三人の同志と共に、部屋に入ると正面の椅子に、ふんそりかへつて居る男が、いきなりよびかけた。

「お前が主謀だな。馬鹿！何と言ふことをするのだ」

「別に馬鹿なことゝは思ひません」自分ながらおちつきはらつて米川さんはこたへた。

「馬鹿なことでない？それなら、貴様達の力で、宣傳が出来ると思つて居るのか！やれるならやつて見ろ。馬鹿！」

米川さんはかつとなつた。腹の底から熱いものがどつと頭につきのぼつて、身体中がぶるぶる震へた。米川さんはいきなり立ち上つて絶叫した。

「やれるとも畜生！今やるから聞いておれ！」その日にやるつもりで懸命に暗記して居た演説を、ポロポロ涙を流しながら、聲をはりあげてやつた。あたりは眞紅だ。まわりに居るものが、味方に見えたり敵に見えたりする。急にたれか手をつつた。氣が付くと、同じく召喚されて居る同志の一人の心

配さうな眼にぶつつかつた。思はず口をつぐんだその時、まつて居たやうに、大きな聲が「馬鹿つ！こゝをどこだと思つて居るのか！」

成る程、そこは警察で、眼の前の椅子には高等課主任の姿がふんぞりかへつて居た。』

酒井は言葉をきつて額の汗をふいた。

二人は何時の間にか、電車通りに出て居た。

『君、電車が來たぜ』

『そいつに乗るんだ』

操一は、酒井の後について乗つた。

五

石の蓋ひのある黒い溝をわたつて、小さな格子戸をがらりとあけると、中から女の聲がした。

『どなた』

操一はこの思ひがけないとり合せに思はず立止つた。

まつ白い、肥つた頸、弧線を書いた眉、輝く瞳、豊かな櫻色の頬——それらのものが、一緒になつた不思議な力が、熱湯のように、操一にせまつて來た。

操一は、思ひがけない女性の出現に、全くちぐはぐな氣分になつて、眼をふせた。

『米川さんは？』酒井がたづねた。

『さつきかへつたが、すぐ出て行きました』

『何か言ひませんでしたか?』

『酒井さんが來たら、例のどこへ、と言つてくれと言ひました』

『そうだらう。それなら』と操一に向つて『君これから歸つてくれたまへ。この女の人も君の下宿近くだ、一緒にかへるだらうから。すまないけれどネ』

酒井の姿は、さつと暗に消えた。

夜が深くなつて居たので、空氣の肌ざりはよかつた。空はいつの間にか晴れわたつて、中空に登りついた半ば缺けた月が、晝の中から抜け出たような光を投げて、町の家々は、一連の半面黒像シルウエツトを、その下にならべて居た。

操一は、我が身近く、強い女の肉体を感じながら、だまりこんで足を運んだ。すると女の方から口を切つた。

『あの人は、身体中に耳をもつて居る人のように動いて居るのですよ』

『米川さんがですか』操一はまごつきながら聞いた。何時かの夏、青い水着と、桃色のオイルスキンの女に、『ね、あの時はやつぱりこげなかつたのですよ』と言はれた時も、こんなにまごついた。が、今晚一緒に歩いて居る女は、質素な着物をキリリと着て、強い足どりで歩いて行く。

『あの人には、世界中の出來ごとの總てが私達に聞ゆるより、十倍も二十倍もの大ききでひびくらしいのです。たとへば新聞で、南米のどこかで、勞働者の反亂が起つたと知ると、あの人の眼はもゐあが

る。動作が活潑になる。それが軍隊の出動によつて鎮壓されたと聞くと氣の毒な程、顔から輝きが逃れ去ります。丁度あの人の前には、大きな窓があつて、その窓から、全世界の不安な空氣——解放に對する渴望、虐げられたものゝひく錚々たる鐵鎖の音、叛逆者の爆彈と不義なる權力、古きものと新しきものの火花を發する鬭争、故なく流される血潮——こうしたものが、警鐘のように、流れこんで来る。そのひびきがあの人には、肉体的の苦痛や、喜びを與へるらしいのです』

『その氣持ちは、貴女にもわかりますか』

『わかります。若い心をもつてゐる人だつたら、たれでもわかる筈だと思ひます』

女は斷然と言つた。そして靜かに微笑した。彼女の肉のふくれあがつた胸は、一步ごとに波うち、常にうかつて居る、頬の上の見ゆるか見ゆるない小さな笑くぼは、そのしつかりした話しぶりに、一層の魅力を與へる。

『だが、私にはわかりません』操一は正直なところを言つた。

『どんなにです？』女は意外だと言つた風に、言葉に力を入れて問ひかへした。

『何故私達が、私達とは何の關係もなしに起つて居る世界の果のことにまでも、心を悩まさなければならぬか。而もあの人達が昂憤したり、悲觀したりして居るその對象は自分の想像でこね上げたもので、かへつて事實を離れて居りはしないか。世界は、あの人達の思つて居るよりは、もつと美しいもので、その美しいものの中に、靜かに自分の生を運んで行くのがほんこの生活ではないのでせうか？』

『何のことですか！』相手は急に聲を高くして聞いた。操一は、この美しい處女の前で自分の考へをの

べうることが大きな喜びのように覺て語をついだ。

『私は、及ど血と、争ひと復讐、裏切りと讒侮、苦痛と怨恨の世を見る代りに、白い殿堂の中を見つめたい。私自身の内心を見つめたい。そして私達より前に美しい靈の殿堂をさびきあげた人々の歩いた道をさぐりたい。人は私を夢想家と言ふかも知れない。然し……』

『然し、人は夢想家だと言ふに違ひありません』女は、大きな聲でさへぎつた。その調子の中に、不思議なおびやかすやうな力強さがあつたので、操一は思はず口をつぐんだ。

『貴方は敵ですネ。人道だ、博愛だ、無抵抗だ、靈だ、内心だ——そうした空漠とした觀念をふみ臺にした空中藝當は、人間がまだ「社會」を發見しない時には、はやつて居たが今では眠氣ざましにもならない。私は貴方を酒井さんの友達だと思つて居た。だが、高等學校ではそんな空中藝當が流行してることだ。そして、そんな藝當を稱して、自己洞察だ、瞑想だ、宗教だ、藝術だ、哲學だ、愛だと言ふのでせう。貴方の身のまわりには、無感覺と自負の壁が堅く立つて居る。それで現在地球にも上つて居る炎の色がわからない。爆音が聞えない。閃光が見えない。民衆の大作進曲が耳にいらぬ。』操一は自分の身体になげかけられて居る燃ゆるやうな視線を感じた。が、その激しい言葉に、答へも出ないうちに又女の聲がひいた。

『さようなら！あなたは、私達の友ではなかつた。多分永久にそうでせう。無感覺と自負の壁を破つて地球の炎を眺めることの出来るまでは』

女は、ふりむきもせずに、街の角をまがつた。市街の騒音と、木偶のような人々の歩みの中に、操一

は獨りどりのこされ立居た。

六

暗い階段を登つて障子をあけると、部屋の中は眞暗だつた。スイッチをまわすと、青い光がさつと流れて、机の上の燃え残りの西洋蠟燭が、艶々しく光つた。昨夜は、電燈を消して、この蠟燭の光で書きものをしたのだつた。操一は机の前に坐りながら、そつと額の汗をふいた。あの女は一体何んだらう？窓の外では、濃い青藍色の膜の中で、夜の街が、幾百の燈火を光らしながら、不安な休息に入ろうとして居た。と、その暗の中から、目に見ぬ手でなげた黒い碟のように、一匹の葡萄虫が、さつと飛びこんで、電燈のまわりを、ぐるぐるとまわつて、バツタリ机の上におちた。おちたかと思ふとさびたつてそしてバツタリまたおちる。そのはかない試みを見て居るうちに、さつきの女の言葉——「空中藝當」が思ひ出された。

『到底達せられない理想のまわりを、激しい期待に身をふるわせながら、夢中になつてさびまわる。光は、眼を幻惑するけれども見ぬざる硝子の壁は、冷い現實の力ではねかへず。夢見る虫は、長い間もがきわつた後、燃ゆる焰を硝子の壁の中に残したまゝ己れは壁の外で冷く死んでしまふ』
頭のすみで、黄色い顔をした小惡魔がへへら笑ふ。葡萄虫は、またばつたり机の上におちた。そのあとを追ふように眼をおとすと、机の上の蠟燭が眼に入つた。氣がつくと、その黒く燃え残つた芯の根に青い小虫の死骸が、ぼつちりとついて居る。

『蠟燭の灯を慕つて、その芯の根に羽を焦して死んで居る小虫——生き生きと燃え上るその灯の光に

満身の希望と熱情をいだいて、一舉に火の中心に身を投げこんだ小虫』
 葡萄虫はまた淋しい羽音をたて、電燈のまわりをまわる。

『灯に集ふ虫——それは人間の悲しい象徴ではなからうか。或るものは、大きな電燈の光に幻惑されて、空しい努力を繰返へし、或る者はほんとに燃えて居る燭火を見出して一舉に火中に身を投じる』
 操一の頭は重くなつた。

窓の外の空は、黒く低くかつた。その月を呑んだ雲のいそがしい往き來を眺めて居るうちに、操一の頭には、不氣味な幻影がういて來た。

——黒い空、たれ下る雲、その裾を縫ふて青ざめた洋燈のような星。病馬の肯のように黒くはげて、ところどころに、赤い土を腐肉のように盛り上がらせた大地。半ば壊れた家、土臺ばかりの廢屋が塵捨場の菌のように重り合ひ、重る菌にかこまれて大樹のやうに圓く嚴然と鐵の城壁が一つ。

黒い空一面を益ふて、煤で書いたような巨大な怪物が、空虚な眼を光らせて、鐵熊手に似た兩手を廣げて、せつせと恐しい仕事を續けて居る。大きな手で地上の建物をぐわらぐわらとこわす。壊した材料を兩手に捧げて城壁の中に注ぎ込む。城壁の中からは、飽くを知らぬ豪華のひびきと、罰せらることなき罪惡の歌と、美裝した猫の嬌聲とが、奇怪な樂の音と共に空に響く。城壁外の土地からは、地底よりもれるような苦痛と怨痕の叫びが、吹きすさぶ黒い風に乗つて聞ゆる。

怪物の仕事は續く。すべての善きもの惡きものが、城壁内に持込まれ、地上に呪咀と怨痕と絶望のみが残るまで……。

やがて怪物は小さな家の總てを壊し終つて、城壁に近い大きな建物にまで手をのばす。今その手のもとに、カルタの家の如く壊れおちたのが、操一の父の家だ。『小資本家』とその家の門には書いてある。破壊は進む。城壁外にはもう何物をも残さない。空は低くたれ、星の光は消え、呪咀と絶望の聲には不思議な凄惨な調子加ふる。が、城壁内の豪奢と飽滿の樂の音は依然として高い。

すでに破壊すべきものを失つた怪物——「時」の怪物は、たゞ一つ残つた城壁をにらんで、空虚な眼をぐつと見はる。不思議な赤い光が眼の空虚を満してかつと燃え、絶望と呪咀は俄然、勇しき叛逆の聖歌に變る。荒敗した地上は眞紅の炎に燃えつた。

「時」の怪物は、立ちあがる。兩手をふりあげる。その手のもとに壊滅するものは？——地上の聖歌は嵐の如く高まつた。

ガン！突然大きな音がした。操一の幻想は、急に消えさつた。机の上には、思ひきりひどく電燈につきあたつておちた葡萄虫が、醜く、腹をかへして、六本の足を動かして居た。この哀れな理想主義者の滑稽な末路に眼をやりながら、操一はまた、さつきの女の言葉を思ひ出した。

『あなたは敵ですネ』

同じ人間を敵と相よばせる現代！そこには是非我々の知らなければならぬ、大きなものがあるに違ひない。さうだ、時代は移る。父の工場の破産も、この移り行く時代の小さなエヴェントだつたかも知れない。

豹のやうに動いた米川、學生の制帽を懷に入れて暗を縫つた酒井、あなたは敵です、と叫んだ若い女——操一は靜かに眼を、机の上の臘燭にうつした。

そこには、青い小虫の死骸が、神聖なる淨衣、白き臘に包まれて、緑金色に輝いて居るのだつた。